

● 学びを委ねる授業 ●

主体的に学び、課題を解決する児童の育成 ～「学びを委ねる授業」の実践を通して～

岡山県 浅口市立鴨方西小学校（校長 三浦嘉子）

- ①一斉授業から、委ねる授業への転換の必要性
- ②委ねる授業とは、「子どもたちが学ぶことに興味関心を持ち、振り返りと自己選択を繰り返して課題解決や課題探求をしていく授業」のこと
- ③委ねる授業の研究を進めることにより見出した、成果と課題

I. はじめに

本校は、岡山県南部の浅口市に位置している。全校児童が98名であり、浅口市・浅口郡の小学校9校のうち、二番目に小さな学校である。子どもたちは、1年生で入学すると一度もクラス替えを経験することもなく、6年間兄弟姉妹のように同じ友達と同じ教室の中で学び続ける。大規模校と比べると、競争社会で切磋琢磨する機会がないという面はあるが、担任が1クラス20名前後の子どもを前にして、子どもの理解や進み具合をしっかりと見極めながら授業を進めることができるため、非常に恵まれた学びの環境であるとも感じている。

また、コミュニティ・スクールが充実しており、子どもたちは地域の方々と交流しながら、体験農園や地域学習を通じて、郷

土愛を醸成している。

II. 研究の概要

1 研究主題設定の理由

令和5年度、本校は、「『え、なんで？』からはじまる算数科の授業づくり ～問題提示の工夫を切り口として～」というテーマで研究を進めた。「静かに最後まで聞きましょう。」「勝手に発言してはいけません。」では、児童が主体的に学習する授業にはつながらない。児童の「～したい」という気持を引き出して、思わず「え？」「ああ・・・」「おお！」等の感動詞が出てくる授業を目指そうと、この研究テーマを設定し授業実践を重ねてきた。授業の導入で児童の「え、なんで？」を引き出すために、教師が示す問題提示の工夫を重ね、令和5

年11月頃、少しずつ、研究の手応えが感じられるようになった。また、児童へのアンケート結果からも一定の成果は得られたと考える。

しかしながら、「児童が主体的に学習する授業」を目指すには更なる取組が必要だと感じていた。

(1) 児童の実態から

令和5年度を取組成果をふまえ、年度末の校内研修で、令和6年度の目指す子ども像について、全教員で話し合った。教員から挙がった児童の実態と教員の願いは以下の点である。

①一斉授業から、委ねる授業への転換の必要性

クラスの児童たちの学力差がひらいていいる。一人の教員が、クラス全員の集団に向けて一斉指導を行うという授業スタイルでは、中間層をターゲットにした指導方法をとらざるをえず、上位層には退屈な授業、下位層には難しく理解できない授業になってしまっている。一斉授業から、委ねる授業へ転換し、中間層から上位層の児童は、自分自身で学んでいく力を育成し、教員は下位層の児童に寄り添い、その児童の学力に応じた個別の指導ができるように進めていく必要がある。

②課題解決型学習の成功体験を他教科に展開したい

令和5年、総合的な学習の時間を活用して、地域の歴史や産業について児童が学び、マルシェで地域の魅力を発信する「鴨西マルシェ」を実践した。鴨西マルシェは子どもたちの一方的な要求による

実現ではなく、コミュニティ・スクールによる熟議の会で子どもたちと大人たちが一緒に話し合い、企画を練って、学びを通して実践を行っている。子どもたちが地域の課題を認識し、その課題を自分事として捉え、課題解決のために周囲の仲間や地域の大人達と一緒に企画を作り出す努力を経験することで、責任の意識を育んでいる。

課題を自分事として捉え、課題解決のために周囲の仲間と一緒に努力することで、自己肯定感や自己効力感を高めるとい取組は、他教科にも展開できるのではないかと考えた。

(2) 研究仮説と研究テーマ

児童の実態をふまえ、以下のように目指す子ども像、研究仮説を考えた。そして、令和6年度の研究テーマを次のように設定した。

【研究仮説】

1つの目標に向けての学びを委ねる場面を工夫することによって、「もっと○○したい」という児童の意欲を高め、主体的に学習を進めることができる授業になるであろう。

【目指す子ども像】

目標や課題を達成するために、主体的に学ぶことができる子ども

【令和6年度の研究テーマ】

主体的に学び、課題を解決する児童の育成～「学びを委ねる授業」の実践を通して～

(3) 研究テーマ（詳細）

長年、教員は、教室の前で黒板を背負って児童に向かって「教える」ということ事に正面から取り組んできた。そのような教員にとって、子どもを信頼して子どもに「学

びを委ねる授業」というのは、言葉では理解できるが、具体的なイメージがつかみづらかった。そこで、全教員にアンケートをとって、「委ねる授業」について共通認識をもつことから始めることにした。

【教員アンケートより（令和6年4月）】

- ・社会科などで「どうやって学ぶか」（資料集で調べるか、クロームブックを使うのか、図書室で本を借りるのか）、「誰と学ぶのか」（一人で黙々とするのか、二人でするのか、グループでするのか）、児童自身にその授業での学び方を委ねる。
- ・子どもたちが課題解決するために、ICTを活用して調べたり書込んだりするなど、自分で考えた方法や自分に合った方法で意欲的に取り組み、課題を解決しようとして活動する姿
- ・算数科「長さ」や「かさ」の学習の場合。単元の学習内容を指導した後、学校にある身の回りのものの長さやかさを「大体〇〇ぐらいの長さかな。」「大体〇〇ぐらいのかさかな。」などと、予測を立てて測定する活動をする。「そうだとすると、家にある〇〇は、〇〇ぐらいの長さかな。」と家庭にある物の長さやかさを予想して調べようとする姿、調べたことを皆に伝えようとする姿が、学びを委ねている姿だと考える。
- ・算数の演習の時間などに、授業内容を正しく理解している児童が、躓いている児童に対して教えることで、教える側の児童は授業に対する自信につながり、教えられた児童は教師から教えられるよりも自分事として捉えることができると考えた。演習などの時間に、児童同士で教え

合うことが「委ねる姿」だと考えた。

アンケート結果を元に、「学びを委ねる授業」の共通理解を図った。「委ねる授業」とは、子どもが主体的に学習することを指し、

- ・基礎的な力が備わっていること
- ・自分で学習を進められる状態であること、また、環境が整っていること
- ・児童同士の学びあい
- ・教師の役割

が重要だと考えた。そして、そのためには、

- ・自己選択の場
- ・明確な課題とゴールの設定
- ・単元の見通し
- ・子どもたちが「学びたい」と意欲をもつための工夫

が必要であると考えた。

昨年の本校の研究テーマ「『え、なんで？』からはじまる算数科の授業づくり ～問題提示の工夫を切り口として～」と今年度の研究テーマ「主体的に学び、課題を解決する児童の育成 ～「学びを委ねる授業」の実践を通して～」は、どちらも「子どもたちが学びたいと意欲をもつための工夫」が重要であり、両テーマが繋がっていることを再認識することができた。

あたためて「学びを委ねる授業」とは「子どもたちが学ぶことに興味関心をもち、振り返りと自己選択を繰り返して課題解決や課題探求をしていく授業のこと」であると全職員で共通理解を図り、研究を進めていくこととした。

2 研究計画

年間を通した、「委ねる授業」の研究計画は次の通りである。

月	実施計画
4	・研究の方向性／課題の整理 ・研究体制の確立 ・研究計画立案 ・教員アンケート
5～8	<情報収集> ・外部研修会参加、講師招聘による自由進度学習の校内研修実施 <校内研究> ・研究授業実施（第1回目）、 ・学ぶ意欲を高める環境づくり、ICT教材探し ・児童／教職員アンケート
9～12	<情報収集> ・外部研修会参加、講師招聘による自由進度学習の校内研修実施 <校内研究> ・研究授業実施（第2/3回目）、 ・「委ねる場面」のパターン化の検討、授業フレーム作り
1～3	・研究のまとめ（「委ねる場面」事例集等） ・次年度の研究計画の立案

3 研究の方法

①実践事例の共有

日々の授業の中での「委ねる授業」の成功事例、失敗事例を週一回、職員間で共有する場を設けた。小さな事例を紹介し合い、校内研究の気運を高めるとともに、新しい取組への敷居を下げる働きかけとした。

②授業研究

指導案を立てて授業研究を行い、よいところ、改善すべきところを話し合った。それを日々の授業での取組や次の研究授業に生かしていった。

③外部講師による指導

講師（葛原祥太先生）から、「けてぶれ（計画・テスト・分析・練習）」について講義頂くとともに、校内研修で各学年の「けてぶれ（注1）」の取組事例を共有した。

注1：学陽書房『「けてぶれ」授業革命！ 葛原祥太 著』参照

④研究成果の確認

研究成果を評価するために、児童／教員へのアンケートや、単元末テスト結果で児童の理解度が伸びているかを確認することとした。

Ⅲ. 実践の内容

【6年生の実践（1学期）】

漢字学習で「けてぶれ」を実施し、「自分に合う学習方法に気づき、身につける」「やったらやった分だけ、力になること」を経験から学ばせる。

（1）目指す子ども像

- ①漢字の学習を通して、自己調整や粘り強さといった態度を養う。
- ②自己を振り返り、何をすべきかがわかるようになる。
- ③ゴール（テスト日）に向けて計画的に学習できるようになる。

（2）授業実践

まずは、「けてぶれとは何か」を児童に説明し、児童自身が5月に実施した漢字テストを振り返って、7月に実施する2回目のテストに向けた計画を立てることからスタートした。授業の中で、毎回けてぶれタイムを設けて、自分が立てた計画に従って、漢字学習を進めていった。

(1) 目指す子ども像

- ①教科書の図や表を効果的に使ったり、
叙述を正しく読み取ったりする力を養う。
- ②友達と協働して活動することで、自分の役割に責任をもつことができるようになる。
- ③ゴール（発表日）に向けて計画的に学習を進めることができるようになる。
（自己調整力）



◆調べ学習をする児童の様子

(2) 授業実践

5年社会科「さまざまな土地の暮らし」の学習で、北海道と沖縄県を取り挙げて「どちらのほうが魅力的なのか」と投げかけた。

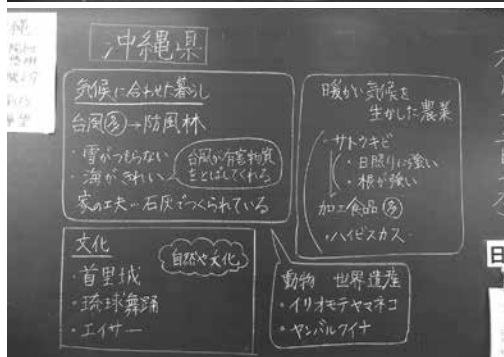
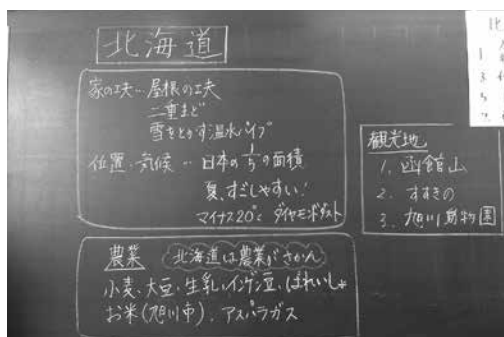
クラスを2つに分け、「気候」「土地」「観光業」「産業」など各チームで担当を決めてから学習計画を立て、それぞれ調べ学習を進めた。その後、調べたことについて説得力をもたせることを意識してタブレット端末で資料にまとめ、発表した。



◆調べたことを発表する児童の様子

学習計画表	
	具体的な計画（〇〇を■まで進める など）
①	学習計画を立てる。自分の調べること・まとめることははっきりさせる。
②	主に特徴的なことをまとめる。まとめなくてもいいものは書かない。スライドは4～5枚にまとめる。
③	まとめると決めたことを、スライドにまとめる。
④	発表する。

◆児童の作った計画表



◆児童が調べたことの板書

◆児童の振り返り

- ・友達と話し合ったり協力したりしながらスライドを作ったので良いなと思いました。
- ・今日は、僕はほぼ完成だったけど、A君が遅れていたのサポートしながら次の時間に完成させたいです。そして「北海道より魅力がある沖縄県」に出来るように、スライドを作って主張したいです。

(3) 成果 (○) と課題 (△)

本取組により、学習意欲が増した児童が非常に多く、「自分事」として取り組む姿が多く見られた一方で、どのように資料を活用したらよいのか、どのようにまとめると効果的なのか分からず悩む児童の姿も見受けられた。友達同士の助け合いはもちろん、効果的に教師が助言をすることも大切だと改めて感じた。

○児童の学習意欲が増した。学習が自分事化し、学力向上にも繋がった。

- ・計画を立て、自分のペースで学習ができた。
- ・友達と助け合って活動できた。
- ・別室でリハーサルをしたい、アドバイスが欲しいなど、自ら考え動く姿が多く見られた。

△どうすればよいかわからず、活動が止まる児童がいた。

- ・自由度が高すぎるとねらいから外れてしまうことがある。
- ・内容よりもデザインにこだわりをもってしまう。
- ・相談しづらいと感じる児童がいる。

【2年生の実践（2学期）】

国語科の説明文の授業を通して「相手に分かりやすく説明するためにはどうしたらよいか」を学び、実践に生かすことができるようにする。

(1) 目指す子ども像

- ①順序や言葉を選択して、分かりやすさを追求する姿。
- ②順序や言葉を友達と話し合い、さらに考え、深める姿。

(2) 授業実践

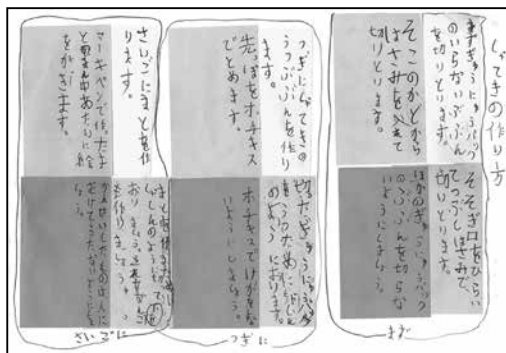
まず、国語科「紙コップ花火の作り方」の学習で、筆者の分かりやすく説明するための工夫を見つけた。次に、「おもちゃの作り方をせつめいしよう」の学習で、見つけた工夫を使って、1年生に向けて、おもちゃの作り方を説明する文章を書いた。その際、生活科の「秋祭り」で作るおもちゃの作り方を説明させた。おもちゃを作る工程の順序や説明するときを使う言葉を児童に委ね、文章を書く活動を進めた。最後に、書いた文章をより分かりやすくするために推敲し、1年生に説明した。

①ざいりようこと うへのかくにん ②作る。	③じゅんじよを 考える。	④するどく 「ツ」を書く。	⑤せつめいする 文を書く。	⑥読み直す。★	⑦はつびよう れんしゅう ⑧1年生に分か りやすくせつ めいする。
-----------------------------	-----------------	------------------	------------------	---------	---

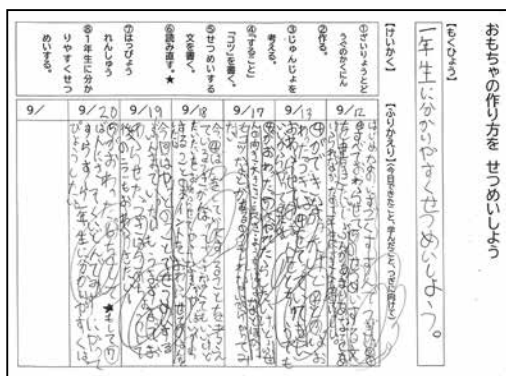
◆児童と立てた学習計画



◆グループで相談して文章を推敲する様子



◆児童のワークシート



◆児童の振り返りシート

(3) 成果 (○) と課題 (△)

本取組で、「秋祭りで作るおもちゃを1年生に分かりやすく説明する」という明確な課題を設定したことにより、ゴールに向かって児童主体で活動する姿が多く見られた。一方で、どのような順序や言葉で説明すればよいか分からず、同じグループの児童に頼りきりになる児童も見受けられた。そういった児童が少しでも自分の力で活動を進められるように支援していく必要があると感じた。

○ゴールに向かって児童主体で活動することができた。

- ・学習計画を児童と決めたことで、自分のすべき課題が明確になった。

- ・「誰のために」説明するのかを毎時間確認したことで、相手意識を持って課題に取り組むことができた。
- ・児童に委ねたことで、グループの中で自然にリーダーができ、相談しながら進めることができた。

△どのような順序や言葉で説明すればよいか分からず、同じグループの児童に頼りきりになる児童がいた。

- ・文章を推敲するという意識が児童の中で薄かった。
- ・推敲の仕方やポイントを再度一斉指導でおさえたいうえで活動を進める必要がある。

【3年生の実践（2学期）】

算数科の球と箱の問題を通して、児童自ら適用題を選択し、既習内容を基に、友達と関わり合いながら自分の言葉で説明をしたり、課題を解決したりすることができるようにする。

(1) 目指す子ども像

- ①既習内容（球の入った箱の縦と横の長さは、球の直径を使って求めることができる。）を使って、適用題を自分の言葉で説明する姿。
- ②自分のやってみたい課題を選択し、友達と関わり合いながら課題解決しようとする姿。

(2) 授業実践

算数科「まるい形を調べよう」の単元の最後に、自分のレベルに合った適用問題に取り組んだ。その中で、学習課題と学習過程を委ねた。

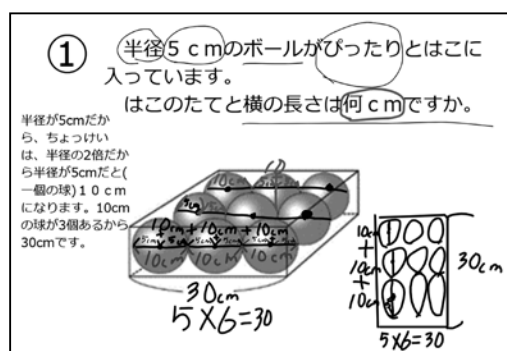
まず、レベルの異なる3つの適用問題を順番に黒板に掲示し、児童は自分のレベルにあった問題に取り組んだ。問題を紙とタブレット端末で配布し、児童が学習形態を選択できるようにした。また、児童がタブレット端末の「チャレンジシート」に、取り組んでいる問題や理解度を適宜入力することで、児童間でだれがどの問題に取り組んでいるかを共有することができるようにした。次に、「チャレンジシート」を基に、同じ問題にチャレンジした友達と交流し、ノートやタブレット端末を使って友達に説明した。



◆友達に自分の考えを共有する様子

	①	②	③
できたところをいれよう がふえんといですね。	半径5 cmのボールがぴったりとはこに入っています。 はこのたてと横の長さは何cmですか。	直径9 cmのボールが15こぴったりに入っているはこがあります。 このはこのたてと横の長さは、それぞれ何cmですか。	たて18 cm、横24 cmのはこがあります。 このはこの中に半径3 cmのボールが何こ入りますか。
問題を作る			
せつ明する	○	○	
できる	○	○	△
やってみる	○	○	○

◆児童のチャレンジシート



◆児童のタブレット端末

(3) 成果 (○) と課題 (△)

本取組を通して、児童は自ら学習課題を選択し、主体的に取り組む姿が多くみられた。また、互いに教え合い、相手に伝える意識も高まっている。一方で、一部の児童は、分からない問題を友人に尋ねることができずに一人で長時間悩んでいたりと、自分の説明を一方向的に伝えたりする様子が見られた。今後は、課題解決の場面から、児童同士が協力して考えたり、図などを用いて相手により分かりやすく双方向的な説明をしたりできるように場の設定や声掛けの工夫が必要であると感じた。

○課題設定が明確で、課題解決のためのツールが児童の主体性につながっている。

・難易度別の複数の問題があり、どの問題を解くかを自己選択できるため児童が主体的に取り組むことができた。

・児童が課題解決をしている中で、適宜今日のめあてを意識する声掛けをすることで、友達に説明しようとする姿が多く見られた。

・チャレンジシートがあることによって、委ねる中で児童が自分の立ち位置を確認でき、何をすればよいかが明確になって

いた。また、児童の中で友達に取り組んでいる問題も把握することができ、児童が自ら交流する友達を選択することができていた。

△分からない問題を友人に尋ねることができずに一人で長時間悩んでいた、自分の説明を一方的に伝えたりする様子が見られた。

- ・問題解決の際に、個人での活動がメインとなってしまう、友達と一緒に考えてもよいという意識が薄かった。初めからグループを作るなどの場の設定の工夫が必要である。
- ・手が止まってしまう低位の児童には、委ねる中でも教師の支援や、声掛けが必要である。
- ・説明文を読むだけの一方向の児童が多かった。
- ・図を示したり、書き込んだりしながら相手意識をもって双方向的な説明ができるように、教師が単元を通して児童がどのような説明ができたらいいかを児童と共有しておくことが必要である。

IV. 成果と課題（研究のまとめ）

1 評価方法

研究の成果を客観的に判断するために、児童へのアンケートと単元末テストを用いて成果を測ることとした。具体的には、「主体的に学ぼうとする力」が育っているかどうかを測るためにアンケートを活用し、肯定的回答の割合を確認した。また、学ぼうとする力が育った結果、学力の定着につながっているのかを測るために単元末テスト等を分析した。

2 成果

児童アンケートは、4年～6年（計49名）は7月、12月の2回、1～3年（計42名）は12月の1回のみ行った。

まず、児童アンケートの結果から、目指す子ども像「目標や課題を達成するために、主体的に学ぶことができる子ども」について、次のような成果があったことが分かった。

設問① 自分で調べる内容や方法を選んだり決めたりすることはできていますか。

設問② 自分で解決方法を考えたりすることはできていますか。

<設問①： 肯定的回答の推移（%）>

	1年	2年	3年
7月	—	—	—
12月	91.7	94.8	100
差異	—	—	—

	4年	5年	6年
7月	61.1	100	90.9
12月	94.4	100	86.4
差異	+33.3	0	-4.5

<設問②： 肯定的回答の推移（%）>

	1年	2年	3年
7月	—	—	—
12月	100	89.5	83.3
差異	—	—	—

	4年	5年	6年
7月	72.2	100	63.6
12月	83.3	100	81.8
差異	+11.1	0	+22.2

4年～6年について、7月から12月の推移を確認すると設問①は6年生で肯定的回答が低下しているものの、設問②では全学年大きな伸びが見られた。また、1年～3年についても、設問①は91.7%以上、②は83.3%以上が肯定的回答であった。

次に、単元末テストの結果を分析した。6年生では、1学期初め、1学期終わり、2学期終わりの3時点で漢字テストの平均点をモニタリングした。平均84.7→95.5→97.1に学力が伸びていることが確認できた。2年生では、国語科「紙コップ花火の作り方」の学習で、平均が9割を超えた（知識・技能：平均94.5点、表現：平均95.0点）。3年生では算数科「まるい形を調べよう」の学習で、平均が8割を超えた（知識・技能：平均95.0点、表現：82.5点）。

以上の分析から、児童の「主体的に学ぼうとする力」を育てることが、学力向上に結びついていることが確認できた。

3 今後の進め方

学習者主体の学びに至るには、4段階あると言われている。レベル①～④は以下の通りである。

- ①先生がわかりやすく教える。
- ②先生が子どもの理解が深まるような活動を準備して理解させる。
- ③先生が子どもの理解が深まるような学習の流れを示して、子どもがそれぞれ進める。
- ④子どもが自分で理解が深まるような学習の流れを計画して学ぶ。

①～④のいずれも必要な授業ではあるが、目標が②になることのないように、引き続き校内研究を進めていきたい。

（校長：三浦嘉子、研究主任：土居綾）

